

富 縣 村

百六十四

役場位置 字貝沼
 舊村名 上新山、下新山、中新山、北林、櫻井、北福地、南福地、貝沼
 人口 三千九百十三人
 戸數 六百二十五戸
 反別 千九百七十五町八畝步
 地價 拾參萬九千六百六拾七圓九錢
 物産 米、生糸、繭、小豆、大豆、粟、石灰
 名所 三峯川沿岸平岩、猿子岩
 舊蹟 池田城、一夜ノ城、中島城、北ノ城、古城、埋橋城、荒城、黑河内城
 學 校 富縣村立尋常高等小學校 二校 實業學校 二校
 社 八幡社二社、諏訪社二社、日枝社
 寺 慈眼寺、眞常寺、寶勝寺、東光寺、金鳳寺、花寺、觀淨寺

氏 名	就職年月	退職年月	氏 名	就職年月	退職年月
村 長			春 日 吉 太 郎	廿三年十一月	廿五年八月
中 原 八 藤	廿二年五月	廿三年十月	中 村 健 十	廿五年十月	廿七年一月
理 橋 条 二	廿三年十月	廿四年九月	六 波 羅 惣 徳	廿七年二月	廿七年十月
下 嶋 昌 治	廿四年十月	廿五年十二月	井 上 銀 十 郎	廿七年十一月	廿九年五月
武 井 國 大 郎	廿六年一月	廿六年十二月	北 原 傳 彌	廿九年六月	廿九年九月
中 原 八 藏	廿六年十二月	廿八年三月	小 牧 徳 祐	廿九年十月	廿九年八月
中 村 健 十	廿八年三月	廿九年九月	田 畑 兼 三 郎	廿九年九月	廿一年十一月
北 原 傳 彌	廿九年十月	廿九年八月	羽 場 条 造	廿一年十一月	廿二年二月
小 牧 徳 祐	廿九年九月	廿一年八月	竹 村 網 造	廿三年二月	廿四年二月
田 畑 増 太 郎	廿一年九月	廿二年九月	小 牧 岩 蔵	廿四年三月	廿五年一月
全 兼 三 郎	廿三年四月	廿四年二月	伊 藤 岩 太 郎	廿五年二月	廿六年二月
井 上 銀 十 郎	廿四年四月	廿六年一月	埋 橋 常 七	廿六年二月	
田 畑 鐵 三 郎	廿六年一月		收 入 役		
助 役			埋 橋 条 二	廿二年五月	廿三年十月
下 嶋 昌 治	廿二年五月	廿三年十月	北 原 傳 彌	廿三年十月	廿五年三月

百六十五

埋橋常七	廿五年四月	廿六年七月
黑河內利平	廿六年八月	廿七年八月
田畑郎治郎	廿七年九月	廿九年四月
小牧德祐	廿九年十月	廿九年九月
田畑兼三郎	廿九年十月	廿九年九月
田畑増太郎	廿九年九月	廿九年九月
小牧文太郎	廿九年九月	廿九年九月
小池彦彌	廿九年九月	廿九年九月
藤澤善右衛門	廿九年九月	廿九年九月
池上源治郎	廿九年九月	廿九年九月
小牧藤五郎	廿九年九月	廿九年九月
六波羅英治	廿九年九月	廿九年九月
吉澤繁治	廿二年六月	廿二年十一月
竹松徳次郎	廿二年六月	廿二年十一月
寺澤丈藏	廿二年六月	廿二年十一月

百六十六

板山文太郎	廿二年十一月	全
春日吉太郎	廿三年四月	廿三年八月
田畑増太郎	全	廿三年十一月
吉田傳彌	全	廿三年七月
中村健十	廿三年十一月	廿四年十月
池上源二郎	全	廿四年九月
會田常太郎	廿三年九月	廿四年五月
六波羅英治	廿四年五月	廿六年三月
小牧岩藤	廿四年十月	廿六年八月
田畑兼三郎	廿四年十一月	廿六年一月
牛山道雄	廿六年二月	廿七年八月
井上銀十郎	廿六年三月	廿七年十一月
小牧徳祐	廿六年八月	全
埋橋湧太郎	廿七年十二月	廿九年二月
武井三郎兵衛	全	廿八年五月
小池芳治	廿七年八月	廿八年八月

竹松鶴松	廿八年八月	廿九年三月
竹村綱造	廿八年五月	廿九年七月
下尾民治郎	廿九年三月	廿九年五月
六波羅倉治	廿九年七月	廿九年九月
池上昌美	廿九年三月	廿九年九月
藤澤善右衛門	廿九年五月	廿九年四月
寺澤謙十郎	廿九年九月	廿九年三月
下嶋平治	廿九年九月	廿九年十一月
黑河内曾我太郎	廿九年四月	廿九年四月
赤羽庄藤	全	廿九年七月
中山萬治	廿九年七月	廿九年八月
鹿野糸太郎	廿九年五月	廿九年三月
武井彦三郎	廿九年八月	廿九年三月
板山清治郎	廿九年十一月	廿九年十月
中村象藏	廿九年十月	廿九年九月
伊東金太	廿九年四月	廿九年三月

百六十七

藤澤六三郎	廿三年三月	全
牛山喜一	廿四年三月	廿五年八月
井上虎重	廿四年三月	廿五年二月
橋爪千代造	廿四年十月	廿六年四月
丸山重治	廿五年九月	廿五年九月
小松庄太郎	廿五年二月	廿六年二月
櫻井鐵十	廿五年六月	廿六年八月
宮澤熊造	廿五年九月	廿六年一月
小池寅藤	廿六年三月	廿六年六月
全友吉	廿六年八月	廿六年十月
春日吉治郎	廿六年四月	廿六年九月
正木銀造	廿六年十月	全
藤澤實治	廿六年八月	廿六年八月
六波羅彌十	廿六年二月	廿六年八月
小牧市郎左衛門	廿六年九月	廿六年十一月
宮下喜保	廿六年十一月	全

第三節 富県地区

一 山麓台地の農村

高遠から河南を通って、桜井・貝沼・北福地・南福地と伊那山地の山麓を通り、火山峠（八五三）越えの高遠道の道筋に集落が点在する。これらの部落は、伊那山地や山麓の湧水が飲料水として用いられ、山際に畑地を持ち、下部に水田耕作をする農村である。点状とする集落は散村形式である。湧水の豊かな上中島・大門は小さな集村形態を成している。

桜井・貝沼の集落は春富井筋（伝兵衛堰）によって新田開発され、井筋に沿う集落とそれを取り囲む水田地帯に分かれている。井筋に沿う桜井は列状集落で、井筋を利用した水場を持ち、屋敷林のある民家も残っている。北福地・南福地の集落は、山麓台地の特徴を持ち、小さな扇状地に畑と水田の混交する散村である。

二 谷間の村

高島谷山（一三三一）の北東斜面と、三界山（一三九六）の西斜面及び新山峠の東西南の三方を山に囲まれた斜面山腹谷間の集落新山地区は、三峰川に注ぐ小松川・新山川に向かって、東西の斜面と

北への斜面の約五・五キロメートルに、枝状に開かれた畑地と水田を持つ山村である。

場広の約一〇〇メートルを最高位に、北林の七五〇メートルの部落まで、南北に長く続く枝状谷間の斜面に、畑地と水田を持つ散村集落である。

谷間の斜面が生産基盤であるが、平坦地の不足から棚田の田畑で農業基盤条件は悪い。しかし、芋家離村もなく、昭和四十年の世帯数二二三が昭和五十六年には二一二と漸減している。人口は、昭和四十年の一、〇五三が昭和五十六年には八六五と減少し、核家族化と共に若年労働者の他地区への移住もあって、やや過疎化の傾向を示している。

最近、新伊那ゴルフ場の建設による観光が、地元民に期待を持たせている。

三 拓け行く台地

昭和三十四年から始まった三峰川総合開発における土地改良事業は、貝沼井幹線・福地井幹線を灌漑の動脈として、貝沼原を中心に北福地・南福地の耕地を一変した。かつての畑地・桑園は水田となり、畑作も作物栽培に変化が現れるなど、台地の様相が変わった。

貝沼の東原・西原・下中島などは、道路整備に伴って台地の中心的な集落の姿を持つ集村に変わり、世帯数も漸増している。

第四節 美築地区

一 山裾の村々

伊那山地の西山裾に笠原の村落がある。河岸段丘上の小扇状地が山裾に樹枝状に入り、低い台地に集落が点在する集村である。

集落の周辺は台地状で畑を持ち、樹枝状に入った谷間は水田を作り、台地の下は水田地帯が広がる農村集落である。

古くから笠原の堤に代表される八か所の溜池を持ち、沢水を利用した灌漑用温水溜池で、水田が密集した地域であった。

集落は古く、家の構造も、中門のある家、入母屋造りの大きな家、屋敷林、かやぶき屋根等の古い形体を残している家も多い。

二 旧道沿いの村々

杖突街道の通る三峰川第二段丘上の集落は、中県・上原・横町・南割等街道に沿って列状集落の街村を成している。旧街道の残る下県・中県は街道沿いに用水が流れ、古い家並も所々残り、街道に面した南側の家の構造には特徴がある。生垣をめぐるし、表が裏門的

広い耕地を持つこの台地が、土地利用と活用を含めて生産性向上の拓け行く台地となってきた。

で、南側の日当たりを利用した構造になっている。

横町・南割は道路改修により古い家は少なくなり、道路沿いには新しい住宅地としての集落に変わってきている。

三 下段沖積地の村々

三峰川氾濫原の沖積地に広がる集落は、古い集落は集村形態を持ち、低位段丘面の自然堤防上に集落を作っている。新しい家は散村的で農業経営上の利点を生かしている。

集落の周辺は畑地で家庭菜園的であり、屋敷林を持つ家が多い。家の構造も大きく、広い作業用の庭を残す家もある農村集落である。

三峰川氾濫原の肥沃な土壌と、豊かな水が、水田耕作に適し、しばしばあった三峰川の氾濫も、堤防の完備によって不安は少なく、古い集落の生活共同体としての形態が残る地域である。市街地に近く、道路整備が行われると住宅地としても適すことから、水田地に住宅が建つようになって、部落の様相にも変化が見られるようになった。